



ベトナム・ダナン経済大学  
学長らら本学で懇談

6月22日、ベトナムの「学」の学長ら3人が生田キダン大学ダナン経済大学を訪問し、佐々木重人学長らと懇談した。写真、ダナン経済大学と本学の社会性開発研究センター/アジア産業研究センター(研究代表小林守商学部長)は、2015年3月から国際交流組織間協定を結び、共同で研究調査を行っている。来学したのはグエン・マン・トア学長、ボー・チ

・トゥイ・アイン副学長、グエン・フー・グエン准教授の3人。懇談には小林研究代表、矢野貴し合った。

鹿住商学部教授の論文  
エメラルド社最優秀賞

鹿住倫世商学部教授(中小企業経営・企業家活動)の論文がエメラルド社「Emerald Literature Awards for Excellence 2018」(ジャーナル部門)の「Asia Pacific Journal of Innovation and Entrepreneurship」誌において年間最優秀論文賞を受賞した。

6月18日、生田キャンパスで授賞式が行われ



で、鹿住教授が筆頭著者。エメラルド社はマネジメント研究で定評のある英国学術出版社。本賞は本学の女性起業家に関する調査報告を行った。

2018年度新規採択一覧

2018年度の科学研究費助成事業(科研費)に新規採択された専修大学の研究は基盤研究B・C、若手研究の計18件と、研究成果公開促進費(学術図書)の1件(下表参照)。今号から新企画「知の発信—科研費採択研究から」で、研究内容や研究者の横顔を随時紹介する。

氏名	所属	職名	研究課題名
基盤研究B	三枝 令子	文学部 特任教授	日本国内で医師を目指す外国人を対象とした医学語彙教材開発のための総合的研究
	澤 幸祐	人間科学部 教授	目的の行動から習慣行動への遷移を支える微視的理論と依存研究への応用
	稲田 十一	経済学部 教授	援助供与国としての中国の台頭と国際援助体制へのインパクトの分析
基盤研究C	中村 吉明	経済学部 教授	ライドシェアリングの成功失敗5カ国のインスティテューショナル・イノベーション分析
	堀 武郎	経済学部 教授	アメリカ校区の予算編成・起債における州学校資本補助金の役割と政府間財政関係
	谷ヶ城 秀吉	経済学部 准教授	戦前・戦後の商社組織と機能に関する連続と継承の基礎的研究
	榎 透	法学部 教授	日本におけるヘイト・スピーチ規制に関する憲法学的考察
	青木 章通	経営学部 教授	サービス業における顧客管理会計としてのレベニューマネジメントの研究
	伊藤 和憲	商学部 教授	インタンジブルズと企業価値に関する研究
	谷守 正行	商学部 准教授	管理会計に対するAIの適合性研究
	苅谷 愛彦	文学部 教授	大規模斜面崩壊の高精度編年に向けた第四紀地質学と酸素同位体比年輪年代学の挑戦
	中林 隆之	文学部 教授	請来典籍の集積・活用からみた古代王権の「知」の統合策に関する総合的研究
	濱松 純司	文学部 教授	形態・統語のインターフェイスにおける英語動詞由来複合語に関する研究
	上平 崇仁	ネットワーク情報学部 教授	態度形成のプロセスに着目した 教育者向けデザイン学習プログラムの開発
	野村 亮	ネットワーク情報学部 教授	未知パラメータを含む情報符号化問題に対する情報スペクトル的アプローチ
田代 亜紀	法務科 教授	多様化する「家族」に憲法学はどのように向き合うか—公私二分論批判、婚姻の自由	
伊集院 葉子	人文科学研究 特別研究員	日本古代における律令官僚制と女官制度成立に関する研究	
若手研究	河野 敏鑑	ネットワーク情報学部 准教授	企業における健康の決定要因および企業業績との関係についての経済学的考察

氏名	所属	職名	刊行物の名称
研究成果公開促進費(学術図書)	志賀美和子	文学部 教授	近代インドのエリートと民衆



ソーシャル・ウェルビーイング研究センター  
ソウルで第4回国際コンファレンス

社会性開発研究センター/ソーシャル・ウェルビーイング研究センター(研究代表原田博夫)はソウル経済学部教授との共催で、第4回国際コンファレンスを6月29、30の両日、同研究所施設で開催した。このコンファレンスは日本経済研究センター、城南信用金庫から後援を得た。

コンファレンスのテーマは「アジアの文脈におけるソーシャル・ウェルビーイング: 比較の視点から」。これまで本センターでは、人々ほどのよ

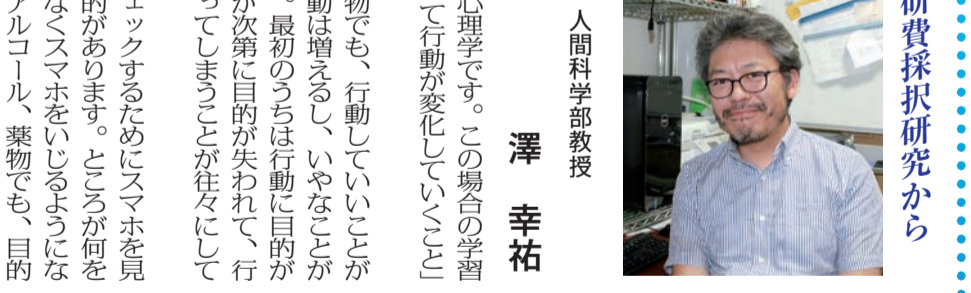
うな社会的条件により幸福(ウェルビーイング)になるか、アジア7カ国(ベトナム、タイ、フィリピン、インドネシア)でアンケートを実施し、その調査結果を分析してきた。これまでの分析は主に各

国地域を個別に取り上げたものが中心だったが、このコンファレンスでは7カ国地域すべてを対象にした包括的な視点からの分析が行われた。

全体として、経済的に十分に発展していながら幸福度の低い東アジア地域(日本、韓国、台湾)と、発展途上にあり幸福度の低い東アジア地域(ベトナム、タイ、フィリピン、インドネシア)という違いが浮き彫りになり、経済成長と幸福度の増大という従来の見方では説明できない状況が改めて確認された。さらに近年のアジアにおける急速な経済発展とグローバル化が社会的

性(幸福)が提唱された。前日には、国際交流組織間協定機関の韓国社会科学資料院(KOSSDA)によるシンポジウム「個人と社会の幸福に関する調査とアジアのデータ・アーカイブ」がソウル国立大学アジア研究所の主催により開催された。シンポジウムでは、中国、日本、台湾、韓国におけるデータ・アーカイブの現状が紹介されたうえで、アジア各国のデータをどのように比較分析することができ

知の発信



行動の習慣化と依存を解明

人間科学部教授 澤 幸祐

専門は学習心理学です。この場合の学習は経験によって行動が変化していくことを指します。

人間でも動物でも、行動していいことがあればその行動は増えるし、いやなことが起これば減る。最初のうちは行動に目的がある。ところが次第に目的が失われて、行動が習慣になってしまふことが往々にしてあります。

メールをチェックするためにスマホを見る、これは目的があります。ところが何をやるわけでもなくスマホをいじるようになる。たばこやアルコール、薬物でも、目的がある行動から習慣行動になり、場合によっては依存になる。依存のメカニズムや対処法はまだ解明されていないことが多い。

今回、科研費に採択された研究は、目的行動から習慣行動への移行を、人間と動物を使って実験し、コンピュータシミュレーションで明らかにしようというものです。さらに、習慣行動に変化させないでいられるか、習慣行動を目的行動に戻すことができるかについても追究。早稲田大、明星大との共同プロジェクトで、行動の習慣化と依存のプロセスを解き明かすことを目的としています。

本学心理学科は徹底した少人数制で教員の専門分野も多彩、教育の濃度が非常に高い。学習心理学ゼミでは企業や他大学との共同研究を進めています。馬術部の協力を得てウマの研究や、ゾウのあくびはうつるのかという研究をした学生もいます。

私は最初、心理学にまったく興味がありませんでしたが、大学3年の集中講義で学習心理学の面白さに目覚めました。学習心理学の目的の一つは、いい行動を増やすこと。今できないことでも学習することで変わることができる。人生をプラスしていく「希望の学問」だと思っています。

(さわこうすけ) 関西学院大学文学研究科心理学専攻博士後期課程単位修得退学博士(心理学)。専門は実験心理学(学習心理学、比較認知科学)。